

今回、紹介している『救命処置の流れ』は、基本的な処置の方法です。コロナ禍の現在は、感染拡大の状況等により、人工呼吸などの一部の手順が変更される場合があります。詳しくは、消防本部までお問い合わせください。(☎53・4176)



5 空気もれないよう鼻をつまみ、約1秒かけて息を吹き込む。2回の吹き込みで、いずれも胸が上がるのが理想ですが、もし、胸が上がらない場合でも、吹き込みは2回までとし、すぐに胸骨圧迫を再開します。



6 AEDの電源を入れ、正しい位置に電極パッドを貼る。電極パッドは、右前胸部(右鎖骨の下で胸骨の右)および左側胸部(脇の5~8号下)の位置に貼り付けます。



7 AEDによる解析中は傷病者の体に触れない。電気ショックを加える必要があると判断すると、「ショックが必要です」などのメッセージとともに機械が自動的にエネルギーの充電を始めます。



8 電気ショックが必要な場合は、ショックボタンを押す。AEDの操作者は「ショックを行います。みなさん離れて。」と注意を促し、誰も傷病者に触れていないことを確認して、ショックボタンを押します。



1 耳元で声を掛け、肩を優しくたたいて反応を確認する。呼び掛けなどに対して目を開けるか、何らかの返答または目的のあるしぐさがなければ「反応なし」と判断します。



2 周囲の人に119番通報とAEDの手配を依頼する。救助者が1人の場合や、協力者が誰もいない場合には、次の手順に移る前に、まず自分で119番通報することを優先します。

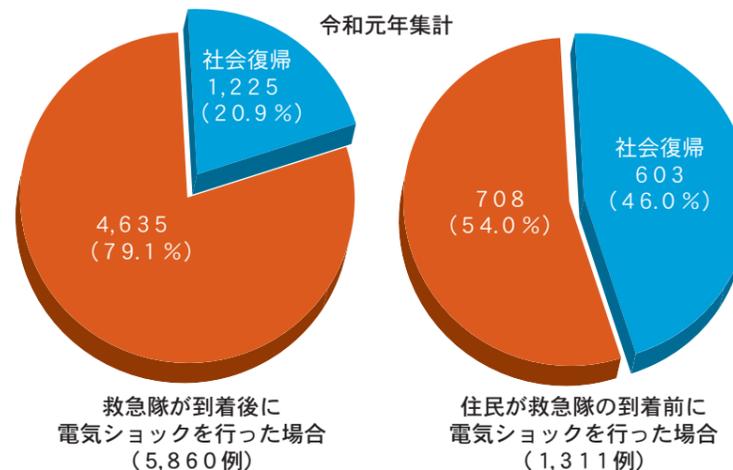


3 胸と腹の動きを観察し、普段どおりの呼吸をしているかを10秒以内で確認する。しゃくりあげるような、途切れ途切れに起きる呼吸『死戦期呼吸(あえぎ呼吸)』、10秒間確認しても呼吸の状態がよくわからない場合は、呼吸なしと判断します。



4 背筋を伸ばし両手を組み、胸が約5号沈むまでしっかり圧迫する。胸の左右真ん中にある胸骨の下半分を、重ねた両手で、強く、速く、絶え間なく圧迫します。ひじを曲げずに垂直に圧迫します。

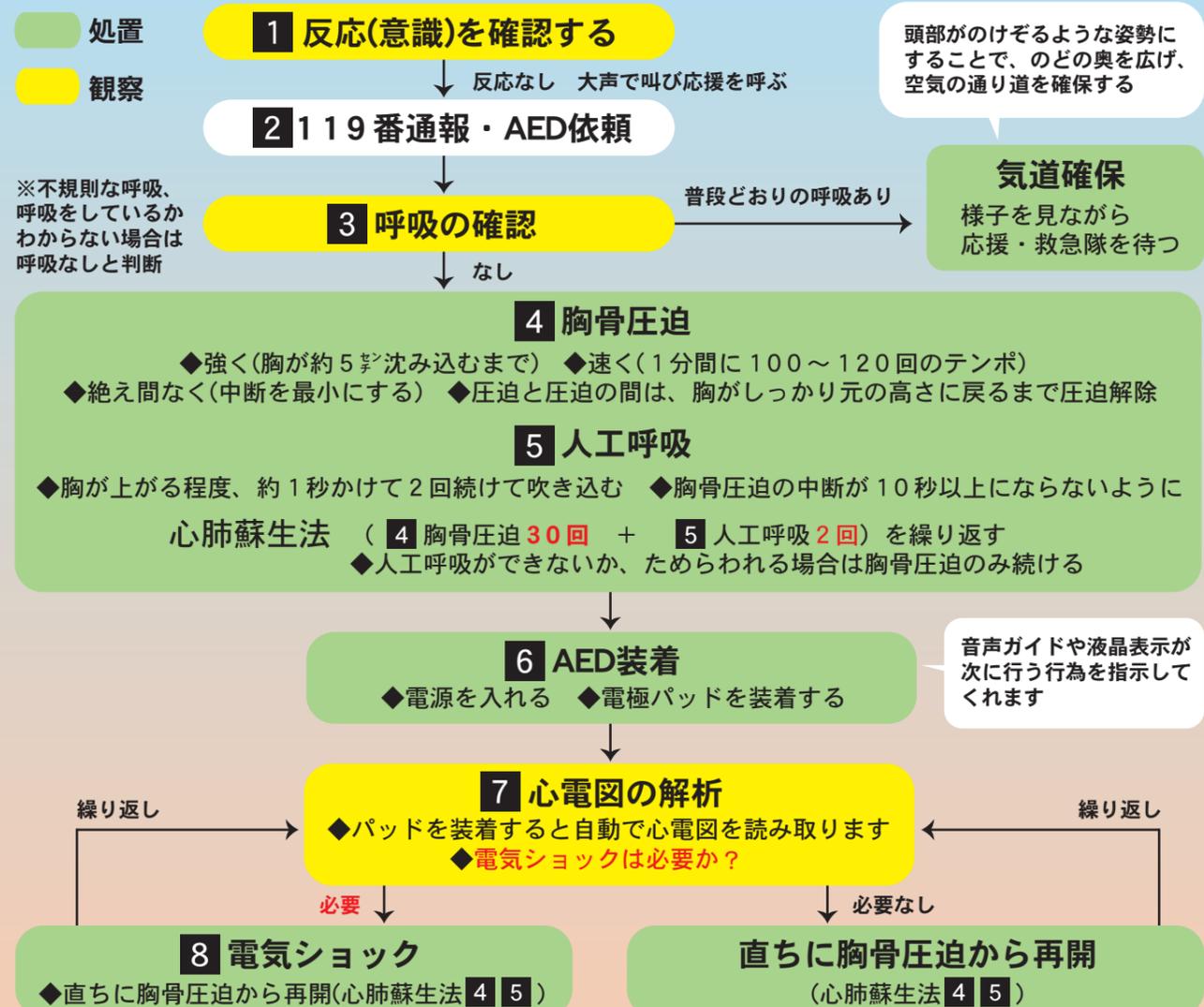
大切な人を救う救命処置



これからの季節、台風や大雨などの災害に加え、水難事故や熱中症などの危険も高まります。いつ、どこで、突然のけがや病気にあそわれるか分かりません。そんなときに、家庭や職場でできる手当のことを応急手当といい、救急車の到着や病院に着くまでに応急手当をすることで、けがや病気の悪化を防ぐことができます。今回は、心肺蘇生法とAED(自動体外式除細動器)を用いた救命処置を紹介しますので、ぜひ、参考にしてください。

その時、大切な家族や友人、同僚の命を救うことができるのはあなただけかもしれません。

救命処置の流れ(心肺蘇生とAEDの使用)



◆初回の心電図解析以降は、約2分毎に自動で解析の指示メッセージが流れる
 ◆救急隊に引き継ぐまで、または傷病者に普段どおりの呼吸や目的のあるしぐさが認められるまで続ける